Earth Negotiations Bulletin
Vol.12 No.200

SB-16 の概略分析

(原文の p12～13:A Brief Analysis of SB16 に相当)

過去、現在、未来

スクリュージおじさん（注：ディケンズのクリスマスキャロルの主人公。）は、ベッドから転がり出ながら、「私は過去と、現在、そして未来に生きるのだ」と繰り返し言った。「過去、現在、未来の３つの精霊が、私の中で生き続けるだろう」と。

チャールズ・ディケンズの古典的な小説のひとつの主人公、エベニザール・スクリュージは、霊の出現を見た。３つの神秘的な精霊は、スクリュージをして、その過去、現在、未来を考えさせ、自分が何者であるかだけでなく、自分の残された人生をどういう方向に進めたいかを問いかけることとなった。

SB-16 の会合で、気候プロセスは、同じような自己認識の崖っぷちに、立たされたようであった。ボンのマリティームホテルで見られた、不気味なほど静かな廊下と半分は空席のプレナリー会合は、昨年末の COP-7 に至るまでの強烈さと緊急性を特徴とした一連の気候交渉とはまったく対照的であった。ある出席者は、それを「ポスト・マラケシュ・ブルース（マラケシュ後の憂鬱）」と呼び、別な出席者は、雰囲気の変化を、「スプーキー（お化けが出そう）」と称した。

現実として、変化は避けられないものであった。11 月のマラケシュ合意に関する一致点は、京都議定書の運用上の詳細に関する作業の完了であり、気候変化の物語の主な章にピリオドを打つものであった。議定書に関係する緊急のそして直接的な問題がほぼ解決されたことで、SB-16 は、過去数年間、ほとんど無視されてきた一連の問題を取り上げ、次に何が起こるかの検討を開始することができた。

SB-16 で明確になったのは何かというと、気候プロセスをどういう方向に持っていくかに関し、各締約国の見解がいかに異なっているかであった。この会議は、このことと将来の交渉に関する焦点と意図で、相反するスタンスにつきまとわれていた。一部の締約国は、断固として現在に焦点をおき、短期的な技術上の課題に取り組む一方、議定書の発効およびさらなる政治的なモーメンタムが出現するまでは、基本的に現状維持のパターン保持を望んだ。他の締約国は、未来を見据え、また長期的な目標と将来の約束の必要性に目を向けていたようであり、このアプローチは、一部の関係者の断固たる抵抗に会った。さらに別な締約国、たとえばカナダなどは、どうやら近い過去に焦点をあてているようであり、また批准をより政治的に受け入れやすくする条件を確保して、マラケシュからの議論の継続という望みにも焦点を当てているようであった。この分析書では、それぞれの見方を順々に検討する。

現在からのクレーム?

現在に焦点を当てる出席者は、技術的な課題の取り組みが、SB-16 の主な優先課題であるべきだと確信しているようであった。これらの出席者は、より広範囲な実施の「本質的な」問題を取り上げるよりも、プロセスについて合意することが会議の任務と感じていた。かれらは、議定書発効での現在の不確実な雰囲気、そしてマラケシュでの合意からのさらなる発展への政治的なモーメンタムがまったくないことからすると、今はまだ、より長期の問題を余り強硬に推し進める時機ではないと論じた。これら北と南の両方からの出席者は、より多くを得るため早すぎる推進をしてしまい、互いの立場をさらに身構えさせるよりも、技術的な問題に「手をつける」方が現実的であると感じた。

これら出席者の姿勢は、議題にも明らかに反映されており、温室効果ガス目録についてのガイドラインや、AIJ パイロットフェーズに関する統一報告様式の改訂、ワークショップの委託条件、技術移転に関する専門家グループといった新規の専門家機関に対するガイダンスなど、多くの技術上、手法上の問題が、議題に含まれていた。この見解を主張する出席者は、これらの問題を検討するグループでの建設的な議論や目に見える成果を指摘して、自分たちのアプローチを正当化していた。

未来への予感

SB-16 に出席した一部の締約国はまた、未来に目を向けていた。オブザーバーたちは、EU、スイス、そして他のいくつかの締約国の中に、長期目標と将来の約束に関する論議開始への明確な希望を、見出していた。これらの締約国は、マラケシュで「BAPA の本を閉じた」ことで、今こそ第一約束期間以後を見始めるのに適当なのだと感じていた。この見解は、ノルウェーが、会議の冒頭で、2012 年以後の約束を強化するプロセスを打ち出すよう SBSTA に求めた時点で、明示された。

この立場は、一部の方面からの強硬な抵抗に会った。特に中国など、より大きな開発途上国のいくつかは、将来の約束について議論することを明らかにしぶっており、ある出席者の言葉では「早すぎるし、不公平」であるとしていた。

この対立は、IPCC の第三次評価報告書、政策措置、非附属書 I 諸国の国別報告書に関するガイドラインについての議論で、もっとも顕著に見られた。

TAR に関する決論書草案作成を任務とするコンタクトグループは、特に困難な時間を持ったのであり、長期の目標に焦点を当てるプロセス開始について文章では、夜遅くまで対立意見の泥沼で時間を費やしていた。

TAR に関する最終的な文章は、一部の締約国を喜ばせたかも知れないが、他の締約国は明らかに失望していた。 SBSTA プレナリーの閉会で、「弱い」表現を悔いるとしたニュージ

ーランドのステートメントは、一部の締約国が妥協の意志を見せなかったことに対する焦燥感を如実に表したものであった。この問題に関する G-77/中国の中での相違も、明確となったのであり、AOSIS 加盟国のような多くのより小さな諸国は、長期の約束を扱うことにもっと熱心であった。

政策措置に関する当初の意見交換もまた、これから目指す方向性に関する意見の相違を表したものであった。EU が国内での行動に焦点を当てることを望んだのに対し、サウジアラビアは開発途上国にとっての対応策の影響を議題のトップにすえることを望んだ。一方、米国と日本は、情報の交換に焦点を当て、予防的なアプローチを避けることを望んだ。その後の議論は、議長が、単純な手続き問題に議論を絞り、議論を関連する COP-7 決定書に基づかせたおかげで、より単純な議論となった。

つきまとう過去

一部の締約国はまた、近い過去に目を向けてボンへやってきた。クリーンなエネルギー輸出と、CDM での吸収に関するカナダの提案は、排出削減目標の達成コストを低減するものであるが、多くのものからは、マラケシュで行われた駆け引きを再開する試みであると見られた。一部の出席者は、COP-7 で望ましい結果が確保された後でもあり、カナダが SB-16 で「またもや谷間に戻る」ことを求めたとして、憤慨していた。

カナダの出席者は、自己弁護として、自分たちの立場について一連の理由を挙げており、それには、カナダのいくつかの州における政治的および経済的な敏感性や、米国の議定書拒否という予想外の決定というものが含まれていた。カナダは、もし自国の企業が、議定書の下での排出削減を行わなければならないとしたら、これら企業は、米国の競争相手に対して、競争上の相対的な不利に直面すると主張している。より良い条件があれば、批准も政治的にやり易くなる。

カナダの出席者の議論は、良くは受け止められなかったが、よりクリーンなエネルギーの輸出を、COP-8 での議題とすることとなり、カナダや、その他いまだに批准を検討中の締約国が、ニューデリーでどういった手をうってくるか多くの者に対して疑問視させることとなった。

一方、議定書に対するロシア連邦の立場という何よりも重要な問題は、ボンやマラケシュと同様、出席者の頭の上に引き続きのしかかっていた。最近 EU と日本が批准し、オーストラリアが米国にならったことで、全員の目がロシアの意向に集まった。しかし、SB-16 での明確な兆候を期待していた向きは、落胆することとなった。しかも交渉介在の中で多くの出席者の背筋を寒くさせたことに、ロシアは、カナダの提案に関心を示したのであった。この交渉介在は、まだ批准していないエネルギー輸出大国が、さらなる譲歩を要求し、そ

れによりマラケシュでの合意を損なうことになる、との恐れを確信させるかのようであった。

亡霊を眠らせる

気候プロセスの現状と未来に関して SB-16 で表明された広範囲な見解は、ある出席者が「自己認識の危機」と呼ぶものを引き起こした。SB-16 に出席していた数人の「気候界の長老（self-styled climate dinosaurs）」たちは、現在の雰囲気についてコメントし、締約国が交渉の新しい段階を定めるのに役立つ指導力とビジョンの必要性を、強調した。SB-16 で多くの「なじみの顔」が失われたことを指摘した一人の出席者は、この転換期において、新しいエグゼキュティブセクレタリーが重要な役割を果たす可能性を強調した。しかし短期的には、同エグゼキュティブセクレタリーは、時期を待つしかないだろう。8 月下旬の持続可能な開発世界サミットでのヨハネスブルグにおけるイベントは、この気候プロセスや他の環境プロセスに、スピルオーバー効果をもたらす可能性がある。さらに重要なことには、議定書発効の明確な兆候や成果が、COP-8 やそれ以後に対して劇的な影響を及ぼすと思われる。